

11月 収まるかに見えた政治の混乱 と 日本の高度情報社会の闇とほころび



◆10月に続き、11月も世相は混沌 いつ穏やかで平和な暮らしができる時代になるのでしょうか

明るい話題は 大谷選手の活躍が世界を未了 原爆被団協がノーベル平和賞受賞

政治はますます混迷 核戦争の危機 トランプ・自民党に厳しい政治判断・兵庫県政の混乱もまだまだ続くのか
インターネット・マスメディア フェイクに翻弄される姿かたちの見えぬ高度情報社会

日本の若者たちも付和雷同から脱する強さと判断力を身に付け、責任と結果の重さに直視せねば・・・と
もう「独りよがり」の「自己中」では生き抜けぬ
でも「付和雷同」では吹き飛ばされる ブラック・闇の怖さに気を付け、闇に動かされぬ自分の目を

いまだに収まらぬ政治の混迷 ポスト 米大統領・衆議院選挙・そして兵庫県知事選
付和雷同とは言わないが、欺瞞・偽・闇・利益誘導の刹那情報に振り回された選挙
インターネット・SNSそしてAI等々真偽を問わずあつと云う間に世界へ拡散する 高度情報社会のこわさを知る
高度情報社会のこわさを知る

自己中心・頂点同調蔓延 刹那の蔓延が判断力を失っている日本社会
「発信する側と受信側の立ち位置」を判断前にチェックしよう
それにしても、情報の公開サイト側は煽りをすれど規制なしの現状
TV番組もSNSも商業主義が大手を振って規制からすり抜ける

「真偽を問わぬ情報拡散のスピードと受信側の無防備な知識・判断力不足」
「いじりをいじめと捉えぬ大人社会とTV番組の垂れ流し」
そして、無防備のまま 煽りの前に拡散暴走するSNS情報

良くも悪くも若者たちの肩に日本の未来がかかっていると。
こんな時代に原爆被団協のノーベル賞受賞が世界に平和の道を開く
また、人類が引き起こした地球環境変化による自然災害の過酷かもひたひたと。

愚痴を言うまい 良くも悪くもあたらしい次代へ世界は変わる
毎日眺める遅れた秋の色どりと変化の美しさに毎日 Good Day!!
そして大谷選手の活躍とそのスマイルに元気をもらった秋。
年老いたわが身にはうれしい秋になりました。

11月 収まるかに見えた政治の混乱 と 日本の高度情報社会の闇とほころび

やっと収まるかに見えた政治の混乱と日本の高度情報社会の闇とほころびがここかしこ

「好きな情報を好きに手に入れ、好きに行動 自由奔放・正義を振りかざして」

でも 好き勝手に人や社会を巻き込んで、あとは知らぬ顔

そんな無責任・闇を野放しで、よいのだろうか…………

誰かが言っていました

インターネットニュースや新聞報道よりも インターネットのSNや最近のTV番組の情報はみんなスピードにかまけた刹那の情報 映像・表情の刺激 そこでは感情論が支配し、論理的な話は疎まれる。

それを利用して発信する人・受信する人。真偽を問わず、情報は瞬時に世界へ拡散し、ボタンひとつで多くの人に影響を与える。インフルエンサーと呼ばれる情報提供者がもてはやされる一方、「闇」とよばれる不文もおおびら目に触れる。何の規制もなく、真偽を問わず、商業主義に徹した情報が、自己責任の名のもとにばらまかれる。

この11月 そんなことが、選挙戦でも繰り広げられたという。そんな状況があちこちで、垣間見えた11月。

自己責任・自己中心の言動がボタン一つの多数者世論としてばらまかれる。

これがまともな社会と見えようか…と

これからを担う若者たちが、怖いもの知らず、怖いもの見たさで、無防備のまま日本を引っ張るのかと心配にもなる。

そんなことが見え隠れした11月。

今 日本ばかりでなく世界が混迷・混沌の荒波の中にある。

感情論から理性論を受け止める余裕が今こそほしい次代だと思う。

ちよっぴり頭をよぎる「がつつ」をメモとして記録しておこうと書き留めました。



トランプ氏次期大統領に当選に思う 2024.11.8. 正平調 より

正平調

6年前、「大統領の陰謀」で知られる米国のジャーナリスト、ボブ・ウッドワード氏が米政権の内幕を暴き話題を呼んだ。狂気に満ちた意思決定のさまを描いた本の邦題は「恐怖の男」◆その男がホワイトハウスに帰ってくる。トランプ前大統領である。現地発の記事に祝意は感じられない。キーワードは警戒と分断か。見出しでこう大きく報じた新聞もあった。「刑事事件被告」◆本人は起訴されようが、醜聞が流れようが、意に介さない。傷の付かない特殊加工のフライパンに模して「テフロン・ドン」と呼ぶメディアも。司法省では早速、起訴撤回の協議が始まったと報じられる◆生活苦にあえぐ人々の胸に、あの「米国第一主義」が響いたのは間違いない。卵が買えない、アパートが借りられない。民主党のエリート主義はもういい。怒りは前大統領を押し上げさらに矛先を移民へ◆思い起こしたいのは自由の女神像に刻まれた詩の一節だ。移民受け入れの精神を高らかにうたう。「疲れ果て、貧しさにあえぎ、自由の息吹を求めよ。私たちが、私の元へ」。これこそ、アメリカ◆民主党の青と共和党の赤を混ぜ合わせると紫に。ハリス副大統領は敗北を認め紫のスーツを着て融和を訴えた。この心が「恐怖の男」にあらんことを。 2024.11.8

兵庫県知事選挙に思う「失敗学」では「失敗の認識のない人は同じ失敗をする」という
兵庫県知事はどうなのか？ ボールは私たち県民に投げ返された

正平調

「失敗学」の提唱者、畑村洋太郎・東大名誉教授が失敗の要因を10に分類している。無知▽不注意▽手順の不順▽誤判断▽調査・検討の不足…と続き、「組織的運営不良」というのが出てくる◆聞き慣れない言葉だが、組織の長が失敗を失敗と認識できぬまま見逃し、傷口を広げるケースを指す。バブル期の拡大路線で倒産した百貨店のそのうちが一例という◆公益通報制度への理解不足、処分を急いだ手順の不順守、取り巻きの意見しか聞かない検討の不足、さらには失敗を認めぬ頑固さで傷口を広げ、議会に全会一致でレッドカードを突きつけられた齋藤元彦知事はさながら「失敗の見本市」のようでもある◆「こちらは思っているのだが、知事はあくまで「失敗」はなく、時々の対応は「適切だった」と今もお考えなのだ、昨日の会見を通じてあらためて思い知らされた◆この溝の深さこそが半年に及ぶ県政空転の主因だろう。混乱を招いた「大きな責任」は感じるが、道義的、政治的責任は明言せずに失職を選び、出直し選に出るといふ◆失敗学の目的は、失敗から学んだ教訓を社会で共有し、未来に生かすことにある。「失敗の認識がない人は同じ失敗をする」と畑村さんは言う。ボールは私たち県民に投げ返された。 2024.9.27

正平調

知事選の選挙期間は参院選と同じで市長選や衆院選よりも長い。広い地域を候補者が駆け回るための時間が確保されているからだ。この17日みなさんは何を考え、悩み、判断したか◆今回の知事選を「既存メディアとネットメディアの戦い」と位置づける人がいた。テレビや新聞は真実を隠し、ネットこそが真実を伝えている、と。そういった疑念と不信が広がっていくのを日々、肌で感じた◆選挙に限らず、わたしたちが記事にするのは、自ら確認した事実だけだ。ただ今回、多くの読者が抱いた疑問にきちんと答えられていただろうか。反省すべき点が多い◆それにしても、正確な事実に基づかない断定口調の主張が力を増す選挙になったのは残念でならない。ネットと既存メディアの発信量の差が有権者の投票行動に影響した面もあったのではないか。検証が必要だ◆二つのメディアは対立するのではなく、足りない点を補完し合うものだとは考える。対立をあまり、分断を深めるような地域社会を望んでいる人はいないと信じる◆激しい選挙戦を制し、齋藤元彦さんが当選した。「生まれ変わる」との宣言に有権者が再起を託した結果だろう。立場を問わずとことん話し合い、着地点を見いだす懐の深い県政を期待したい。 2024.11.18

正平調

「デイスカッション（議論）ドラマの傑作」。イラストレーターの和田誠さんがそう評するのは、陪審員の話し合いを描いた映画「十二人の怒れる男」◆主演のヘンリー・フォンダが言う。「偏見を排除するのは難しい」「偏見は真実を見る目を曇らせる」。もう一つ、たびたび登場する言葉があり、こちらも印象に残る。ときに異論を受け止め、ときに新たな展開へとつなぐ一言。それは「あり得ることだ」◆英国が真つ二つに割れた、欧州連合（EU）離脱が残留かを問う国民投票から少し経て、BBC放送が伝えた記事に同じ言葉を見つけた。離脱の結果に混乱したという男性が、ある気づきを口にした◆こんな内容である。離脱派も残留派も主にネット上で互いの主張を「あり得ないこと」と切り捨てた。ネットは同じような意見が共鳴し合う場所だ。振り返ってみて、違う主張に耳を傾け「あり得ること」と受け止められなかったことに気づかされた◆国民投票の後、同じように感じた人が少なからずいたのだろう。考えの違いを超えて直接、言葉を交わす「場」がいくつか生まれたそうだ。偏見をできるだけ排除し、選択を「分断」で終わらせないために◆なるほどと思わせる。兵庫県知事選を終えたばかり、でなくても。 2024.11.19

バンラディッシュの子供たちに聞かれた「ねえ、月と日本はどっちが遠い」どっちだと思う？ 大阪のおばちゃんへの答えは・・・

正平調

好奇心に満ちた目で子どもたちが聞いてきた。「ねえ、月と日本はどっちが遠いの」。どっちだと思おう？ そう尋ね返すと、「月は見えるけど日本は見えないから、日本の方が遠いと思う」◆もう30年近く前のこと。まるで童話のようなやりとりをバンラディッシュの子どもと交わしたのは、神戸女学院大准教授の南出和余さんだ。大学生の時、NGOのスタディーツアーで同国を訪れ、人のつながりを大切に国民性にすっかり惚れ込んだ◆バンラディッシュの農村を研究する文化人類学者になった南出さんの心はいま、心配と楽観の間で揺れている。この夏、強権的なハシナ政権に不満を持つ学生や市民ら数千人が首相公邸に乱入し、政権が崩壊した◆楽観—というのはお隣のミャンマーと違い、軍が中立の立場を守っているからだ。学生らの要望に応じて暫定政府を仕切るのはノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス氏。貧困層に無担保で融資する銀行を設け、利益を社会に還元する仕組みを作った◆先日、とある勉強会で南出さんからかの国の歴史を学んだ。バンラディッシュの人たちの人懐っこさは「大阪のおばちゃん風」らしい◆そう教わると、遠い国がぐつと近くなる。平和な日々が戻ることを、月より近い日本から見守りたい。 2024.11.6

平和な日々が戻ることを、月より近い近い日本から見守りたい

「私たちの世界は嵐の中にある」気候変動と広がる戦禍 これらとの危機と無関係でいられる国などないと国連事務総長は訴える
子供たちが神に祈りの言葉を唱えながら理不尽な死を迎えている。もうやめよう、もう終わりにしよう、もう。

正平調

「私たちの世界は嵐の中にある」。先月、国連総会の演説でグテレス事務総長がそう述べた。気候変動と広がる戦禍。これらの危機と無関係でいられる国などないと事務総長は訴える◆パレスチナ自治区ガザの人々が、イスラム組織ハマスとイスラエル軍の戦闘によって嵐の真ただ中にさらされ、1年になる。戦火はイランを巻き込んでレバノン南部に広がり、嵐はやむどころかますます強まっている◆ガザは身を寄せ合うように暮らす貧しい人たちが多い地域だ。ハマスはそこに学校や病院を建ててきた。それを拠点だと主張して爆撃すれば犠牲者は増えるばかり。いくら事前に避難を呼びかけようと◆ガザの死者は4万1千人とされ、6割以上は女性と子どもたちだ。行方不明者は1万人を超す。これはもうテロとの闘いではない。ジェノサイド（民族大量虐殺）としか言いようがない◆空爆、侵攻、さらに飢餓まで。絶望を重ねるガザの人々の叫びに触れる。「イスラエルは私たちが皆殺しにしようとしている。世界は私たちを見殺しにしようとしている」◆パレスチナは三つの宗教の聖地を抱える地だ。そこで神に祈りの言葉を唱えながら、子どもたちが理不尽な死を迎えている。もうやめよう、もう終わりにしよう、もう。 2024.10.7